

奴隷市場 1章

幼い頃から陵辱や暴力を受けてきた
キョウヤ。

この出会いはキョウヤを幸せへ導く
のかそれとも…

奴隷市場待望の第1章

奴隷市場

「大丈夫ですか？」

そう言って金色の髪に左目が真っ赤な少年はパンを差し出した。

俺は死に物狂いでそのパンにかじりついた。

裏社会で生きていた俺は任務に失敗しスラム街の路地裏で死にかけていたところだった。

ふと少年を見つめるとニコっとした笑顔を見せその場から立ち去った。

今でもあの笑顔を忘れられずにいる。

それが俺とキョウヤとの初めての出会いだった。

それから時は流れ10年後：

キョウヤはスラム街から遠く離れた街の奴隷市場の小さな檻に閉じ込められていた。

「おら！飯の時間だ！」

そう言って男はキョウヤの口に無理やり銀の筒をねじこむとそこからスープ状の液体を無理やり流し込む。

「おうっ…ごほっ…ごっ…ごくっ…ごほっ…」

残飯を混ぜたスープそれがキョウヤを始めここにいる奴隷となった少年たちの生きる綱となっている。

「…あっ…ありがとうございます…」

そう言ってキョウヤは男にお礼をする。

「キョウヤは今夜客が来るから準備しとけよ！」

「かしこまりました。ありがとうございます。」

ドクンドクンと心臓の鼓動が早くなる。

毎夜繰り返される陵辱。

キョウヤを始めここにいる奴隷達にとっては苦痛の時間だ。

客で賑わう奴隷市場の夜がやってきた。

今宵も無垢な少年達が金持ちの大人の性欲の捌け口にされる。

奴隷市場では奴隷を買うこともできるがキョウヤのような傷ものは売れることはない。

檻から出されたキョウヤは手錠をされ客の待つ部屋まで連れていかれる。

「失礼いたします。キョウヤと申します。今宵は買っていただきありがとうございます。」
ドクンドクン鼓動の音がうるさい。

万が一にでも粗相をしたら殴る蹴るの暴行の末お仕置きという罰が待ち受けている。

客は無理やりキョウヤの腕を掴むとベットに放り投げた。

「…うっ」

薄汚れた服を剥ぎ取られ奴隷の印の首輪だけの状態にされる。

「汚ねえ身体だなあ。この淫乱めっ。」

パチンッ

いきなり頬を殴られる。

「ゴミ以下のお前を買ってやったんだからせめて楽しませろよ」

客はキョウヤの髪を鷲掴みにし荒々しい口付けをする。

「んっ…っ…はあ…」

じゅるじゅると音を立て唾液を絡み合わせる。

そのまま客の口はキョウヤの胸をいたぶりはじめる。

左の乳首を歯でかじり右の乳首をつねりあげる。

「…ああっ…！いたあ…っ！」

グリグリと虐められた乳首からは血がにじむ。

「痛いだど？気持ちいいの間違いだろ？」

客に買われたら奴隷は必ず快楽を増強させるための薬をあらかじめ注射される。

その効果もあってかキョウヤ自身が反応しはじめている。

「チンコおったてて気持ちよくなってんじゃねーよ！客を気持ちよくさせるのが先だろ。おら啞えろ。」

客はキヨウヤの頭を抑え口に無理やり自分自身をねじこむとおもむろに腰を振りはじめる。

「あがつ…！おお…つぶ…あつ…」

「歯立てたら全部抜いてやるからな！」

客はキヨウヤの頭を激しく前後に動かした。

「おっ…ぶ…おお…っ」

キヨウヤは喉の奥までペニスを押し付けられ酸欠で気が遠のきそうになっていた。

「もっと集中しろっ！」

そう言って客はキヨウヤの頬を殴った。

その拍子にキヨウヤの歯が客のものに当たってしまった。

「いっ…このっ！役立たずめっ！」